

2025 年 1 月 26 日（日） 14:00～

つくりかけラボ 16 トークイベント

「「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」における写真と言葉と自分の距離」

登壇：金川晋吾（本展作家）、丸山零（美術家）、川又健士（ワークショップ参加者）

進行：庄子真汀（千葉市美術館学芸員）

庄子：学芸員の庄子と申します。本日は本展作家の金川晋吾さんとゲストに美術家の丸山零さん、それからワークショップに参加いただいた川又健士さんをお招きしております。最終日となりますので、有意義なトークになるだろうと思っております。それではここからは金川さんにお任せしようと思います。

金川：こんにちは、金川といいます。そうですね。ちょっとざっくり今回の企画でやっていることの説明をすると、ワークショップに 6 名の方に参加いただき、僕を含めた 7 人それぞれに一つ壁が与えられています。生まれてからこれまでの自分が写っている写真を集めてきてもらって、それを壁に貼り、さらにそこに言葉を書いてもらうというワークをやってきました。全 3 回、10 月に 1 回、11 月に 2 回やりました。

「知らないうちに始まっていて、いつ終わるのかわからない」というのがタイトルなんですけど、このタイトルがとりあえず指し示しているのは「自分」ということなんですね。自分って、何か知らないうちに始まっていて、それがいつ終わるのかもわからないものですよ。なんかそういう、ちょっとよくわからないし実はよく考えると不安な存在、不安定なものとしてありますよね。

僕は父親や同居人たちとの暮らしを撮って作品にしていることもあり、自分自身について語ることについて考えることがけっこう多くありました。そのことも今回の企画には関係していると思います。

今回の企画を考えるときに、わかりやすいやり方としては、「自分の写真を並べ、自分の人生を振り返り、自分のことをうまく表現してみよう」みたいに進めていくこともできたと思います。でも、そういうことだけがしたいわけではなくて、自分のことをうまく表現するというのがそもそも何だっという問題もありますよね。

自分というものを扱うにしても、自分のことをより理解するというような方向性だけではない、もっと色んな展開の可能性はあるだろうなとは思っていて。だから、具体的にやる

ことは決めていて、自分が写っている写真を選んで何か書くということをやするわけなんです。そこで何を指すかははっきりと決まっていなかった。だから、書くことも何を書いてもいいということになっていました。

ただ、前回のトークの時に川又さんが言ってくれたことなんですが、「何でもいいと言いつながら、この企画全体の空気として、自分自身について考える方向に向かう雰囲気があったという、フィクションとかそういう方向には向かいにくいような、そういう空気があった」みたいなことを言ってくれていて、それはたしかにそうだったなと思いました。

あと、川又さんがこのワークショップのなかで「書いていると、写真から離れていく」という話をしてくれて……

川又：はい。自分が書いた壁にも書いたんですけど、写真について書いていけば書いていくほど写真から離れていくという実感があって、けっこうそれが僕はこのワークショップの中で一番強く思ったことで、っていう感じがあって。

金川：このことについて僕もなんとなく感じながらも、あんまりうまく言葉になってなかったんですね。それに対して川又さんから「写真に対してフェアじゃない気がする」という言葉が出てきて、なるほど、面白いなと思いました。こういう問題について、もう一度話したいと思ってトークイベントをやろうと思ったんですが、誰がいいのかは浮かばなくて。そこで川又さんに誰か思い浮かぶ人はいますかと聞いたら、丸山さんの名前が出てきたんです。

川又：僕は直接は面識はなかったんですけど、そういえばというので、以前丸山さんの作品が載っている Web サイトがあって、そこにテキストとかも載っているんですけど、そこである昔の写真について書いたり、そこからまた違うことも書いたりっていうテキストを読んだことがあって、そういえば丸山さんいいんじゃないかなと思って。

丸山：ありがとうございます。

金川：僕も実はその前にお会いしたことがあって。丸山さんはいろんなことされていますが、メインはドローイングですかね。絵を描かれていて。

丸山：ドローイングを描いたりして、写真とか、最近だと詩集を出したんですけど。

金川：ちょうど詩集を出されたタイミングっていうのもあって、書くっていうこととか、ちょうど今週でしたか、あれは。出版記念で、千葉雅也さん、哲学者の。とトークされるっていうのがあって、そのタイトルも生活と……

丸山：「イメージと言葉」みたいな感じでしたかね。

金川：そうか。で、「生活と制作についても話します」というのを SNS に書かれていた気がする。

丸山：そうですね、あんまりうまく喋れなかったんですけどね。

金川：僕はそのトークを聞きに行って、ああ、丸山さんをお願いしてよかったとすごく思ったんですけど。

丸山：それはよかったです。

金川：なので、丸山さんはドローイングとか、いろんなメディアを使って表現されている。ただ、どちらかというとなんか自分自身のことを語ったり、自分のことを素材にするって感じではないですね。

丸山：直接的には、自分の何かある種の過去の経験だとかをテーマにして書いてはいないんですけど、でもやっぱり僕なりに自分を掘り下げる作業っていうのは作品を通してやっていて、それはこうアプローチが金川さんとは違うのかなと、そう思っていますね。

金川：丸山さんは毎日手を動かしてたくさん制作をしているんですね。

丸山：そうですね、言葉じゃなくて手で考える人いるじゃないですか。ほんとに手で考えて、それでこう何か自分の深掘りというか無意識みたいなものをどうやって出すかみたいな作業をずーっとやっているっていう感じです。

金川：なるほど。ただ、ホームページに掲載されている昔の写真について書かれたテキストとかは、論理的でもあり、言葉の人でもあるなという印象を受けました。

丸山：ちゃんと人に読めるように。やっぱり絵と違って、けっこう自由に描いても見られるものになるじゃないですか。だけど文章って、本当にちゃんと基準みたいなものがあるじゃないですか。読める。

金川：一応文法というものがね。

丸山：そうそうそう。だからそれはすごく意識して書きますよね。

金川：まずコンセプトとか、こういうことを表現しようとかを考えてから作るっていうより、手を動かして、だから詩を書くっていうのも言葉を使うけど、出てくるものをまずバーッと出すっていうやり方なんですよ。

丸山：とにかく自動式。もうバーッと書いて、後でちょこちょこっと直すぐらいの。だから改めて、言葉で何か自分のことと向き合うってどういうことなんだろうってこの前、先週か、ワークショップのこの展示を見て思って、自分でも帰った後とかに昔の写真とか出してみ、ちょっと思い出してみたんですよ。思い出して書きはしなかったんですけど。

そしたらけっこう、やっぱりなんかこう、こういう文体になったっていうのはありましたね。例えばいきなりイメージなしで自分のことを書くってなったら、主語を立てて、動作があって、その結果が出る。はっきりイメージがないからもっと説明するじゃないですか。だけど確かに写真を前にして何か思い出して書くと、「確かこれは一年前のどこどこで、友達と行った所だな」とか、いきなり始まるっていうか、それ面白いなと思って。だからこれを見ている、ものによっては「あ、思い出してる思い出してる」みたいな感じで書いているものとかがあったり、あと、ものによっては勢いが整っているものなんかがあると、事前に用意したものなのかななんて感じながら読んでいましたね。

金川：なるほど。まずどういうものとして見えましたか？

丸山：いや、難しい！ 最初に思ったのは、僕こんなに自分の写っている写真ないかもなって思いました。なんだろう、あと、恥ずかしくて自分の写真出せないなって素朴なこと、感想から始まるとまずそういうのを思いましたね。

それで、追って見ていくうちに、金川さんのお仕事とつながるものがあるなと思ったのが、金川さんの写真作品って、顔ってすごく重要なモチーフじゃないですか。これを見た後改めて思ったのが、「似ているとか違うとかってということって何だろう」って思ったんです。だから金川さんの写真、お父さんの写真とかお婆さんの写真を見ると金川さんに似ているけど、ここちょっと違うなとか、そういう風に入っていくというか。これ見てもなんかこう、小さい頃の写真とかあって、小さい頃と現在とか、その二つが並べてあっても全然関係がわからなかったけど、ある種の時間として見ることで、その人だってわかるなって普通に、素朴に。顔の機能というか、違うこととか似ていることっていうことを改めて考えだし、その二項対立って色んな言葉のソースになるなって思いましたね。例えば「これに似ているから嫌い」とか「これと違うから好き」とかそういう感情を起動させる装置みたいな二項対立だなーなんて、改めてこの展示を見て思いましたね。類似とか差異とかっていうことについて考えました。

金川：なるほど、面白い。顔が似ているとか類似とかの話がまず出てくるのって、血縁関係においてですよね。血縁の場合はその似てる似てないに何か根拠があるように思われる。けれども、血縁じゃなかったら、その似てる似てないは、偶然、たまたまみたいになる。

丸山：偶然に似ているということになる時、どこが似ているだろうって、だんだん言葉が溢れてくるじゃないですか。鼻の形が似てるとか、これってお母さんに似てるから、人によっては気持ち悪いと思うこともあるかもしれないし、似てると違いに、いろんな感情が出てくるなって思っ

金川：なるほど。

丸山：顔って面白いですね。

金川：今回のこのワークショップにおいても、丸山さんのように写真に写る顔をじっと見て、顔のことについて考える人、そこに写っているものに留まる人と、その顔のことから自

分自身のことをいろいろと想起させていく人と、大きくふたつに分けられるように思いました。そういう二つの方向性というか。

丸山：これを見て何か個人的な記憶があるっていうのはありましたね。例えば川又さんの写真で、愛知トリエンナーレに行った時というキャプションが付いた写真があったんですけど、そういう記憶をパッと思い出せる装置になった写真がありましたね。だから愛知トリエンナーレの時は美大生だったわけじゃないですか。何かそういうのを見ると、僕も美大の頃を思い出して、すごく胸が「あ、戻りたいな」と。あと、デッサンで書いてあるやつがあった、うまくいかなかったとか、本当そういうのは、素朴にどんどん出てきた。例えば茂木さんの写真は、何かクラスの女の子が持ってきたアクセサリーの冊子で、みんなで買って付けたな、厳しい声があったな、笑ったり切なくなったり、こういうことがあったなというのを、どんどん思い出しました。

あとやっぱり、白黒の古い写真とか、僕は欲しいと思います。僕は個人的に、古い写真をめちゃくちゃ集めています。家に何百枚もあった。そういう写真を見ると、あれも欲しいな、普通に欲しいなと思う。

金川：いいな、欲しいなとは思うけど、それ以上のことは思わないですか？

丸山：あんまり思わない。考えればきっと出てくるかもしれないけど、怖くて考えないのもありますよね。自己分析のバランスってすごく難しいなって、これを見て思いますよ本当。自己分析ってどうやるんだろう。僕はあんまり自分のことを言葉で見つめたりしないので、例えば何かやっちゃったとか言って恥ずかしいなとか思いながら、電車の中でしにたくなるときとか結構あるんですけど、だけど言葉で自分を振り返って、解釈するみたいな作業ってあんまり得意じゃない。

金川：自分自身に対する興味がそんなにないわけですか。

丸山：いや、興味があるから、何かの作品に残しているんですけど、例えば自分の過去の記録とか。だけど自己分析がうまくいったことないんですよ。自分のことを単純な情報にしちゃって、自分の人生の大きなうねりとか感情のうねりを言葉に落とし込むと、すごく干からびた物になっちゃうことがよくあるんです。だからあんまり作品と考えないで作っている

んです、言葉にしない。自己分析できる人すごいなと思った。

金川：なるほど。

丸山：こうやったら、思い出しながら書くのだったら、ある種の分析に近いことができると思いますよね。

金川：なるほど。

川又：さっきの写真を見て思い出される感情は、その前に出ていた「似ている」と通じるのかなと思ったんですけど、写真を見て思い出される記憶と、何かに似ているから言葉が出てくるみたいなことって、僕はワークやりながらそのどっちもがあったかなという感じはありましたね。イメージ的なものから出てくる言葉と、記憶から出てくるような言葉の二本線で行っていたかなって思いました。

丸山：なるほど。写真ってあれなんですかね、やっぱり過去なんですかね。

金川：それはやっぱり時と場合によると思います。撮られてからどれくらい時間が経っているかも関係してくるし、見る側との関係性にもよりますよね。「こういう存在がいます」みたいな現在形として見せているような場合もあると思います。その一方で、「写真に対してフェアじゃない」みたいな気持ちになる時って、過去になっている気がするんですが……。

丸山：なんですかね。僕が金川さんの写真を見ていて、今と髪型が違うとか、そういうことを手掛かりに過去だっていうことを自分の中で納得っていうか、小さい金川さんなんだけど、この二人の中でどっちかが金川さんに似ているから金川さんなんだとか、どうにかそれで探り合ってっていう作業をしますよね。この写真とか、これとかもいろいろ。

金川：写真を見るってどういうことなんだろうかとくに「よく見る」ってどういうことなんでしょうね。「見ながらいろんなことを連想すること」って「よく見る」ってこととはちょっとちがいますよね。でも、何かそうやっているんなことが出てきやすい写真というものもある。絵を描く人にとって「よく見る」っていうのはむしろ連想とかじゃなくて、そのもの

をよく見るってということだったりしますよね。

丸山：写真を元にして、例えば写實的に絵を描こうとした時に、そこからの連想じゃなくて、鉛筆のいわば煤けた汚れで写真に写っているものを正確に描き写すわけです。だから写っているものの意味とかを考えないで、ただ単にその汚れをこう……。それこそ画家がカメラになって、ただの光のバランスを描き写していただけていう風な見方もあるし。写真を見るってそうですね、どのくらいあるんですかね、見方って。パターンが知りたいです。とりあえず。そういう本はないですかね、新書とかで（笑）。

金川：新書よりもうちょっと敷居の高い本じゃないとそんなややこしい話はできないかもしれないですね。見ている時に起こっているややこしさの話をしようとしている本はいくつかある気がします。それこそロラン・バルトの『明るい部屋』ってすごく有名な写真論の本ですが、あれはそういうことなんだと思うんですよね。逆に言うとあれは写真作家による写真表現のための本ではない。「写真の表現について何か知りたい、学びたい」とか思って読んでも、実はあんまりよくわかんない本なんだっていうのを僕はだいぶ経ってからわかりました。最初読んでもあんまり面白くなかったんです。それはあの本が写真を見ている時に起こっていることの話をしている本だからなんだと思います。

丸山：今回出ている写真というのは、それこそ記憶のフックになるようなものがいっぱい画面上に転がってそんな感じですよね。

金川：そうです。だからそういうのを選ぶみたいになったんですけど、川又さんはどんな基準で？

川又：そうですね、思い出されるものから写真は選んでいくって感じですね。それの方が楽しい。楽しいというのが一番ですかね、まず。

丸山：これは恥ずかしくて出せないっていうのはありました？

川又：いや、僕はあんまりなくて、恥ずかしくてもそのまま、恥ずかしさ自体をそのまま書きちゃうみたいなのところもあって。

丸山：僕、そこでプリントできるじゃないですか。携帯見たんですよ。そしたら、アニメのキャラクターに自分の顔をコラージュしている画像が出てきて、これはアカンなど。

金川：最近のやつ？

丸山：最近、友達とふざけて送った、そういう自分の写真とかしなくて。

金川：僕ね、けっこうその恥ずかしさのことはすごい気になっているというか。表現って要は恥ずかしさとの関係で生じてるような気がして。恥ずかしさとの関係性によって、その人の表現が決まってくるみたいな。

丸山：俳句は書けるけどポエムは嫌だとか、いろいろいますよね。絵は描けるけどみんなの前で歌えないとか。

金川：そうそう。ただその一方で、恥ずかしいけどもう一回それを取り出してみたら、そんなに恥ずかしくないんじゃないかみたいな。一瞬わっと起こる恥ずかしい感情と、でもそこでもうちょっと踏みとどまって写真を見続けて「本当に恥ずかしいのかどうか」を確認してみると、また少し変わってくるかなと。

川又：さっき丸山さんが言っていた、写真を絵に写すみたいな冷静さと一緒なんだと思うんですけど、どうですか？

丸山：そこまでただのオブジェクトとして自分の写真を扱えたらそうかもしれないけど、やっぱり感情入っちゃいますよね。自分の写真となった時。

川又：自分がぎょっとする自分の写真があったとして、それは実はあんまり恥ずかしくないんじゃないかって、それもさっき丸山さんが言っていた、機械的にデッサンするようにもって引いて見る感じと近いのかなって。金川さんの書いている大学院卒業式のあれとかは、写实的に記述し直すことで、そんなに恥ずかしくないものとしてあるのかなって思いました。

丸山：僕も「葬送のフリーレン」を見てフリーレン様に憧れたから、顔をはめてみたって友達に送って（笑）。

金川：なるほどね。確かにその記述を添えると……。

丸山：まあ笑えますよね。それだけ出したら気持ち悪いおじさんだな。

金川：あと、今回、自分にとってのこの壁、この作業と、この場を設定したから、他の6人のみんなの壁に対しても、関係とか責任、感情みたいなものをなんか持っている……何が言いたいかというと、「これ、やってることよくわかんないな」「何をみんなにやってもらったんだ」という気持ちとかがあって、何とも言えない、悪い意味でもないモヤモヤみたいなものがこの場全体にはあるんですけど。ふと自分の壁だけを取り出して、これを僕が一人で延々作る作業だったとしたら、なんかそれに対しては、すごく別に悩むところがないと思ったんですよ。自分にとってこの作業は面白い。これが何なのかちょっとまだ上手く言えないんですが、そうなんです。

丸山：ここで写っている場所にもう一度行こうって思ったりしました？

金川：そんな感じはあんまりないですが、この作業もっとやってみたいなっていうことを思ったんですよ。

丸山：そうですね、やっぱり向き合う作業もある意味、もちろん希望して参加されているわけですけど、だけど人によったら体調崩しちゃう人とかもいたと思うんです。いなかったかもしれないですけど。結構ハードなことだと思うから、それは責任感を感じるのはあると思いますよ。結構ハードですよこれ。僕も黒歴史とかここに貼って書き始めたらなんかもう嫌になっちゃいますよ本当に。

川又：ハードさはそんなに僕は感じなかった。そういうハードさよりも、金川さんはどんどん書いていけるっておっしゃったんですけど、僕は逆に言葉が結構止まっちゃうなと思って、例えば思い出されるエピソードとか、そういうのはどんどん書いてはいけるんですけど、果たしてそれを増やしていった壁の密度を上げていっても、仕方ないんじゃないかとい

う感情になって、その苦しさの方があったかなって感じ。

丸山：フリーハンド？ その場で書いてる？ 用意したものを、書いてきたものを写しているわけじゃなくて？

川又：僕はこの場に来て、この場で思ったことを書いていましたね。

丸山：そうなんだ。それはすごい。

金川：そこですよ。ここで自分の書くことの密度が増えていくことに、僕は手応えというか、これを増やしていったら面白いし手応えを感じる人と、川又さんはむしろそのエピソードが増えていって、何になるんだみたいな。

川又：ノレなくなっていったみたいな感じです。

金川：その違いってというのが、何なんでしょうね。

丸山：壁を越えるってということですよ。普通のことを言ったら。だって、僕だってある所に止まっちゃうと思うし。

金川：自分のことを書いていくことに？

丸山：そう。僕、小説をこの前書いていて、自分の過去のことを書くんですけど、やっぱり完全に自分として書いてないから、ある種私小説的な面もあるんですけど、割と詩と近い自由連想的に書いた作品なので、本当に全部自分なんだけど、自分過ぎないから書けたっていうのが。難しいけど。

金川：僕の場合、写真をきっかけに自分の断片的なエピソードを積み上げていけるっていうのが面白くて。小学１年生のころ、学童のおやつの時間に２年生とか年上の人たちの何人かが皮だけをちまちまちまちま食べて、餡だけが残った肉まんを見て嬉しそうにしていたっていう記憶、エピソードが頭のなかに残っているんですが、そういう話を書ける喜びみた

いなものを感じているのかもしれない。

今回のやり方で自分のことを記述することで、『いなくなっていない父』という本を書いたときはまたちがうかたちで、ばらばらの断片をそのままどんどん積み重ねていくかたちで自分のことが語れるなと思いました。そういう新たな語り方を発見した喜びがあります。

丸山：それは僕も共感します。詩を書く時も、やっぱりすごくトラウマの記憶だったり、印象に残っている記憶というものをメモしておいて、それを起動装置にして何か書いていくみたいな作業をしますね。だから、そういった今の思い出の話とかいうのを。正直言って、僕は記憶力に自信がないので、ある小さい頃の思い出を何か物語なり散文詩なり何なりにしようとした時に、その象徴的な出来事の前後の記憶というのをそこまで細かく思い出せないです。思い出せる人は思い出せるじゃないですか。だから本当にあったことをそのまま思い出して全部書こうってなると止まっちゃうっていうか。いろんな記憶を混ぜ合わせて、あるトラウマだったり象徴的な記憶を補強して、強めていくっていう作業をしますよね。

金川：丸山さんは、自分のことを小説にするとときに、自分のことをわかってもらいたいみたいな欲望はありますか？ 僕は多分ね、そうやってエピソードが書ける、つまりある物語を生み出せる喜びみたいな言い方したけど、それもありつつ、もうちょっとそれとは別に自分自身のことを知って欲しいみたいな欲望がある気がするんです。けれども、川又さんとか丸山さんとかの話を聞いていて、そういうために作品をあんまり使っていない感じがしたんですけど。

川又：僕もこれを作品だとは思えない感じですよ。これは作品ではないということによって超えられない壁がある。それは今の話を聞いて思いました。

金川：なるほど。そうですね。そこが皆さんを苦しめていたところですよ、多分。

川又：金川さんがこのワークショップ全体に対して感じる不安は、金川さんの作品に対しての不安ともつながるのかなっていう。金川さんのワークショップ全体の作品としての質に対しての不安ともつながるのかなと思いました。

金川：なるほど。

丸山：でもなんかすごく川又さんの壁が魅力的で、いろんな所に叙情があるというか、「は～、いいな～」みたいな。ある意味、作品として出来上がっていると思いましたけどね。だから人によったら、もっとすごく真面目な人だったら、本当にきっちと年代順にまとめて、19XX 年の何年何月何日で、どこどこどこどこでっていう風にかこうとする人とかがいともおかしくないと思うんですけど、案外みんな結構自由にやっていて、構成もハチャメチャじゃないですか。ある意味作品……何なんですかね。

金川：それで言うとやっぱり、もうこの場が参加者の人にとって与えられた場なわけじゃないですか。参加者の人からすると、これを作品って言うことはかなり原理的に難しい状況の中で、でも作品っぽい振る舞いもしないといけないっていう苦しみを与えていたのかもしれない。

丸山：確かに、人には見られるものになるし。

金川：僕はみんなで日記を 3 ヶ月書くっていうワークショップをやっているんですけど、日記の場合はそのフォーマットは僕、主催側が与えたものであっても、すでにもうあるものじゃないですか。僕が作ったものではない。だから、参加者が日記を書けばその人の日記になる。でも、今回の場合はフォーマット自体が主催者側によって作られている。だから今回の場合は、新たに用意されたフォーマットの上で、自由にやってくれて言われるむずかしさ、苦しさがあったのかなって思いました。

川又：大学の課題を思い出すというか。「これ、でも作品にはならないしな」みたいな。課題の時って。

金川：そのたとえばけっこう的確な気がしますね。

丸山：ワークショップ中に、参加者の方にアドバイスとかはされたんですか？

金川：僕はそんなにしてないですね。ただ、今回の記録撮影に天野裕子さんっていう写真家

の方に入ってもらっているのですが、天野さんからアドバイスではないですが、写真に言葉を書いていくことについて少しお話してもらいました。天野さん自身がそういう作品を作っていて。僕は写真を直線的に並べるようなことをこの壁のうえでも最初はやっていたんですが、天野さんは「真ん中から広がっていてもいい」「書いても消せるので、どんどん言葉を書いてみたらいい」とか、壁の広がりを意識するようなアドバイスをしてくれたと思います。

自分のことを語りたい欲求と、それがあんまりない、そういう方向にあまり行かない人、その違いって何なんでしょうね。

丸山：僕、自分のことをわかってもらいたいっていうふうに作品は出さないですね。「面白くない？これ」みたいな。

金川：そう。それは僕もそうなんですけどね。「面白くない？これ」がメインなんですけど、どうもそれだけではなくて……。

前フリだけして一旦休憩に入りますね。千葉さんと丸山さんは従兄弟なんですよ。でも、この前のお二人のトークでは、その二人の関係性の話はイベントの後半ぐらいになってやっと出てきた。でも、そのお話がすごくおもしろかったんです。丸山さんは子どものころはあんまり学校に行ってなくて……。

丸山：そうですね、幼稚園からです。自動車学校しかまともに卒業してない。

金川：で、中高の頃はギャングと呼ばれ、ちょっとどういうことしていたかはあんまり言えないとおっしゃっていましたが笑

丸山：まあ言えるっちゃ言えるけど、まあね。

金川：で、その頃の丸山さんは時間の感覚がないというか、未来とか過去とかのことを全然考えてなかったっていう話をされていましたよね。そういう感じだったから、いわゆるルールとされるようなものを破ることがどう問題なのかもよくわからなかったみたいな感じの話をされてました。

丸山：そうですね。でも今は僕普通に生活していて、警察に捕まるとか、これやったらまずいでしょとか、考えるようになりましたよ。

金川：その過去とか未来って時間の幅があんまりなかったっていう話がすごいおもしろいと同時になるほどと思って。そこに欲しい商品が並んでいたとしても、未来という時間の幅がなければ「あ、いいじゃん」で貰えちゃうとか、人を殴るとかも、殴ったらどうなるかとか考えない、という感じになる。その話はすごく面白いなと思いました。でもそんな丸山さんが千葉さんに家庭教師をやってもらうことで、本を読み始めたりして、時間の幅が生じるようになって…。

丸山：そう。言葉で考えるようになったんです。それまで何にも本当に考えなくて。

金川：っていう話ってめっちゃ面白いじゃないですか。僕はめっちゃ面白いと思ったんです。でもね、丸山さんはこの話をなかなかしない。トークのときも、千葉さんが話題を振ってやっとその話になったみたい。で、その話聞いたら、俄然丸山さんへの関心がぐーっと強くなるじゃないですか。僕が丸山さんだったら、まずその話をしちゃうと思います。まず俺はこういうことがあり、そういう俺が今これをしているみたいにしてしまう。いや、そこまで露骨にはしないかな。その塩梅は調節するかもしれないけど、何にせよ、そのエピソードを僕は語りたくなるといったんです。そのエピソードを面白いこととして披露したくなる。でも丸山さんにはそういう欲望があんまりないように見える。

丸山：それを最近文章にしている。長い文章にまとめてみたんです。そっか、面白いのかな？ だから作品にするっていうよりも、これも作ってみたっていう感じで、あんまり今までそういう話は表ではしてこなかったし、作家仲間にもそんなにしてないですね。最近千葉にめっちゃ振られるから、しょうがなく喋っているっていう感じで。書いてみればって言うから書いてみて、友達と従兄弟にしか見せてないんですけど。

金川：でもそれはこうやって焚き付けられて次第にそうになっていったりするんですかね。

丸山：そのうちね、見出しに元ヤンアーティストとかってね、売ってくださいって調子乗るかもしれない。

金川：そこらへんの塩梅をね、その語りたさっていうのがなんかある。ある人となない人がいるということに関心があります。

丸山：自分の出し方の塩梅は難しいですね。

金川：僕は自分でその塩梅を面白がっていると思います。

丸山：それは自分も、段階を経て出せる深度、深さみたいなものは経てきたというか、最初はもっとすごい格好つけた作品を作っていたんです。それがだんだんパンツ脱げてきたっていうか、そういうのはあります。やっぱりすごく、どの作品でも自分との向き合いだと思っ
うんですよ。だから、それをどこまでやれるかっていうのは正直ありますよね。それを僕は
今できるようになってきたところもあるし、まだできないなっていうところもあるしって
いう。

(休憩)

金川：何かありますか？ 川又さんの的に何か引っかかったところ。

川又：恥ずかしさが作品の制作の一個のキーになるみたいな話をしたじゃないですか。その
ことと、「ワークショップ参加者にとってはこれが作品ではない」っていうことが、なんか
つながりそうだなって思ったんですけど。

丸山：これに参加できるっていうことは、こういうことをやるのは恥ずかしくないから来た
んですね。

金川：まあそうですね。そんな自分の写真を並べて貼るなんてもう考えられないっていう
人もいるわけですね。

丸山：だって正直に言うと、携帯に実は自分の自撮りありますけど、超恥ずかしいです、出
すの。

金川：オープンワークショップの写真を見ていると、自分でやってもらっというなんです
が、「こんな写真を屈託なく出せてすごい」という驚きがあったりしますね。でも、自分
の自撮りを見せる恥ずかしさって一体何なんでしょうね？

丸山：「こいつ自撮りするんだ」と思われる、恥ずかしい。

金川：なるほどね。自分が自撮りしていることをこういう形で言う分には大丈夫だけど、そ
のイメージそのものを人に見せることには恥ずかしさがともなう。

丸山：いろいろ考えちゃうじゃないですか。「これ何に使ったんだ、出会い系？」とか。そ
うじゃないんだよみたいな。この前マイナンバー作る時に撮らなきゃいけなかったから撮
ったんですとか説明したいけど説明しきれない部分もあるし。

金川：なるほどね。そういう自意識が働く。

丸山：めちゃめちゃ自意識が働きますね。だから芸術のジャンルにおいても、僕ダンスとか
できないですもん。

金川：僕ね、ものまねが恥ずかしくて絶対できないんですよ。この場でしてって言われて
も、そういうふうに体が動かない。誰かになるのではなくて、自分として何かをやる分には
いいんですけど。演じるのも結構ムズいけど、やろうと思えば多分やれる気がするけどちょ
っとハードル高いみたいな。

丸山：僕、大検を取って高卒を取ってから美大受験するんですけど、最初の予備校生の時に、
講評の時に前に出すのすっごく恥ずかしかったです。

川又：人前に自分の自意識みたいなものをどういうバランスで作り出すかって悩めますよ
ね。

金川：そうですね。普通に考えてそれはやっぱり恥ずかしい。でも、それを何回かいろいろ

やっていく内に慣れてきたってことですよね。

丸山：だから僕も段階を踏めば、慣れれば、人前でダンスを踊るとかできますよね。やろうとしてないだけで。

金川：そういう類の慣れによってなくなっていく恥ずかしさと、本当にどうしようもない、どうにもならない恥ずかしさみたいなものと両方あるのかも。自分を表出する・自分のことを外に向けるってことの恥ずかしさの問題と、さっき川又さんが言ってくれた作品の話はつながっているのでしょうか。僕はこの壁は自分の作品と言えるけど、このワークショップ全体を作品と言えるかと問われると、それはまだ言えないなって思ったりしたんですけど。

丸山：僕がもし仮に参加してやったとしたら、結構他の作品になるアイデアいっぱい出そうだと思いますね。この部分は文章として書いてみたいなっていう風に膨らませる、いくつかのネタが出てきそうですね。制作している人は特に面白いワークショップなんじゃないですかね。

金川：これ自体が作品にならなくても、これが制作のタネになるっていう可能性がありますね。あと、もうひとつは、もうちょっとカウンセリング寄りというか、自己分析、自己治療に使うという方向。そういう可能性もこれにはあると思うんですよね。そういういくつかの要素が今はごっちゃになっている。ここは美術館なのでやっぱり表現の問題を扱う場所でやっているということ。その難しさというかややこしさがあります。これがまたちがう場所でやっていて、これを外部に向けては発表せずに、参加者が自分自身の理解や治療のためにやるっていう可能性もあると思います。

丸山：さっき言った川又さんの、あるテキストと写真の中で立ち上がる感情とかって、確かに力ちとした作品って言えないっておっしゃってましたけど、自分で読み返した時とかにどう思いました？

川又：あの壁に対して？

丸山：そうです。

川又：考え方というか、こういうことに自分は興味があったり、こういうことに対して反応するんだってという気づきはすごくありました。写真の中のこういう気持ち悪いものに目がいて、それについて何か考えたくなるっていう癖があるんだなっていうのは振り返って思いますけどね。それが作品とはいかないかなと思うんです。

丸山：でも、プロダクトとしてカッコリした絵とか写真とか彫刻とか映像、何でもいいんですけど、そういうものよりもむしろある種の芸術性みたいなものをすごく僕は感じました。商品みたいに整っているよりも、ある言葉にならない問題みたいなものがあるものが芸術作品だと思う。そういうものを即興で作っていくっていうのは、芸術制作の根源というか、一番本質的なものだとは僕は思いますね、このプロセス。

金川：そういう面白いものを皆さんがそれぞれ出してくれていると思うんですけど。日記のワークショップで考えると、そこで日記をみんな書いて、「日記ができた、これを本にしてみよう」って売ったりしている人がいる。ただ、そういう風に今回はならない。なりにくい。僕が感じているもやもやは、参加者のみなさんにかなり頑張ってもらって、かなり繊細で面白いものを作ってもらったけども、その当人たちに還元されるものがあるのかどうかってことなんだと思う。

丸山：これを川又さんはやって、次の作品のアイデアにするようなネタを得たとかってあります？

川又：今はまだちょっとわかんないです。

金川：今日、そちらの壁の草野さんも来られていて、ちょっと話を聞いてもいいですか？ 今話していることに対して、何か話せることがもしあれば。これをやってみてっていいことですね。

草野：そもそも、見返りのなものに対してあまりそういうことは考えずに参加していました。確かに個人的には結構大変というか、これに考えを割く時間というのはこの数ヶ月多か

った部分もあるけど、でもそれによって何か見返りないなとか、特には考えませんでした。私はこれがこの場だったからできたことだなと思っていて、割とそれ自体がありがたいというか、嬉しいことだと思って満足はしていて、ここからこれがどうなっていくのかみたいなところははまだあまり考えられていないかもしれない。私がそういう作家的な立場になったとして、これをやるかといったらどうだろうっていうところもあるから、作品なのかというのはどうなんだろう。

金川：草野さんも美大に行かれていて、今回のこのプロセス、やっぱり作品を作るっていう意識とはだいぶ違う感じでやっていましたか？

草野：美術館という場所でやっているから、少なからず人に見られる。知らない人にも広く見られるということについては意識せざるをえないというか、考えていなかったわけではもちろんないし、見られることによって、こういう見られる場で個人的なことをすることの怖さみたいなものも持ってはいて……何の話でしたっけ。

金川：制作って何かっていう話でしたね。見られるということへの意識。

草野：途中まで、人に見られること、見た人はこれを面白いと思うのかということを手探りで考えていたけど、そういうことをやりに来ているというよりは、自分が普段言ってこなかったことを書きたいって思って、そういうことをできる場であるこの場が結構珍しいから、途中から人にどう見られるかとかは気にしつつ、あえて無視して、自分の言いたいことをとりあえず書こうっていう意識になっていった。

金川：なるほどなるほど。僕の印象では草野さんは「どう見られるんだろう」ということを考えながらも、それをどこかで一旦無視して自分のことを出してしまおう、そして出してしまうことで何が起きるのかを面白がるような、何か起きるのかを実験するような、そういうことをやっているのかなと。「こういうことも出してしまった」「こういうことが出てきた、出せた」みたいなことを面白がっているように見えました。

丸山：僕がやったら自分の癖みたいなものと向き合いますよね。草野さんのだったら、パッと抽象的に見た時に、淡い赤とかオレンジ系が主張色で、そこに緑とか青とかがあって、こ

ういう色を選ぶ人なんだなって思うし、そういう自分の癖みたいなものと向き合う作業になっているので、いろんな角度からこれを見直すと、僕は自分の作業として成立するなと思いましたね。

金川：こういうことを喋りたがる、話したがるとか、そういう自分の癖が見えてきますよね。その時に壁であるということが自分にとって多分新鮮で。僕は絵を描いたりとかまったくしてこなかったからっていうのもあるのかもしれないですが、大きな平面に向かって作業するというのが新鮮でした。直線的じゃない感じとか、書いたら即それが見られるものになるっていう感じとか。

丸山：草野さんと金川さんの色味全然違いますね。

金川：色味っていうのもあるんですかね、それぞれの癖みたいなものって。

丸山：配置とか色味とか全然違うし。川又さんのはちょっと青い感じ。金川さんとちょっと近いのかな。でも金川さんのはもうちょっと茶系が入っているというか、『father』の写真集とかに色彩感覚が近いのかな、全体的に。

金川：川又さんの写真は澄んでいる。なんか綺麗ですよ。そういう写真を選んでいるのか。光が綺麗。

話を戻すと、丸山さんがこの壁を眺めるときの視線は、自分を理解してケアしていこう、キュアしていこうという感じではないですよ。自分の癖を見出しつつ、それは作品に還元するためのものというか。

丸山：そうですね、ケアはあまり考えないかな。どちらかというと、話を戻ると癖とか、選んでしまうものの並び方とか、そういうのを見て作品にするとした時に、それをどう展開するかとか、部分的にどう矯正するかっていうのをやりながら、自分にしか作れないものを見つけていく作業をする。学生の時もそうですし、今もそうですよね。

金川：その作業には、喜屋武さんがやっていた、自分の「見られ」に対する意識の問題がある種の傷みたいなことについて言及したり……。

丸山：確かに喜屋武さんは結構強く自分のことを書いていますよね、他の方より。それは印象ありましたね。

金川：丸山さんみたいな人もいれば、喜屋武さんみたいな人もいますよね。

丸山：数年後にじわっとくるんじゃないですかね。僕なんて先週の土曜に一回見に来た時、見た時は「ふーん、なるほどなるほど」ってぐるぐる回っていて、一体何だったんだろうなって電車の中で、新宿方面の西日が入ってくる車内でこれを思い返してエモくなった。不思議な展示だなと思って見ていました。だから参加した方は時間が経つと消化されるんじゃないですかね。

川又：確かに、これは作品ではないから書けることの方が多いです。ささいなエピソードしかり、別に作品にならないかもしれないようなことを書いてもいいんだと、そういう場なんだと思えたから書けた部分もありました。

丸山：でも、そういう部分にこそ一番自分にしかできないとか、自分にしか感じられない風景があるはずだから、それが作品になるといいような気がしますね。というか、日々それを僕は自分で頑張って見つけようとして、手を動かしたり、ものを書いたりします。ものは言いようですよね。作品だって言っちゃえば何だって作品になるわけだし。だから、自分がどういう形で納得するかっていう。

金川：そもそも作品というものを作っていない人もいますよね。作品を作るということがその人にとってやるべきこととしてあるのか、そうでないかというところがまず大きな分岐点としてあるかも。

丸山：内田さんも何かされていたんですよね。

金川：内田さんは、住んでいたマンションの中に有線の番組を作るサークルみたいなものがあったって、マンションの人たちと番組を作っていたそうです。それで取材とかしてそれが面白かったみたいですね。今回の参加者は全員、制作ということをやったことがある人たちなん

ですよね。森下さんも写真をされていて、暗室に入ることもできるそうです。制作ってというのはいろんなレベルでありますよね。

僕は、参加者の皆さんに何がもたらされたのかみたいなことを、考えなくていいんですかね。どうなんでしょう。

丸山：いいと思いますよ。

金川：ワークショップというものについての考え方。自分のような立場の人間は、参加者に何かやってもらうことに対してどういふかまえていたらいいいんでしょうね。

川又：日記のワークショップの時とかは、参加した人はワークショップを終えて実感変わったとか、文章が上手くなったとかそういう実感がある。

金川：本当にそれは人それぞれで、そこに対してはあまり思わないですね。多くの人は良かったって実感があるんです。参加者はみんな何らかを得ているからというものもあるのかもしれないけど、それはもう日記というフォーマットがはっきりあるからなのか、こんな気持ちにはとりあえずなっていない。

丸山：決して全員ハッピーにならなくてもいいし、いろんな作品があって、ものによったら本当に嫌な思いをするものだってありますしね。川又さんはこれをやって、大きく分けるとどんな感情でした？ 楽しかったとか嬉しかったとかつまらなかったとか。

川又：最初は楽しかった。後半手が止まって苦しいですよね、率直に言うと。でもなんかまだ咀嚼しきれていない要素があるだろうなと思って。難しいですね、参加した側としては。はっきりと言えることはないというか。言葉にしづらいですね。

丸山：最初の作業で何が楽しかったですか？

川又：自分の人生にあった、誰にも話していないけどささいな記憶に残るエピソードとかあると思うんですけど、それが書けるんだというのは面白いですよね。でもそこから先に行けなくなってしまう感じで、難しいですね、そこからの言葉が見つからない。

丸山：写真から思い出したこと以外で、何かもうちょっと違うこと書いてみたかったとかはあるんですか？

川又：全然ありますね。もっと違う展開がありえたんじゃないかなと。それが何なのかはわからないですけど。

丸山：結構それ難しいですね。

金川：そういう問いが出てきたのはいいことですな。

丸山：僕の捉え方と違った。僕だったら本当にやって、観察して、なにが自分なのだろうってそこからエッセンスを抜き取って行くと思うですけど。このプロセスでなにかが押し出されているとは思えないかもしれないですね。

金川：その違いを……

丸山：川又さんのが、ある程度まで構成した先にある何かを言葉にしようとされていたじゃないですか。でも僕だったら、ふわーっと思いついたのを張って書いて、結果として出したものから何か自分のエキスを取っちゃえばいいじゃん。

金川：丸山さんはまず出しちゃうっていうことをするわけですね。これを出そうか出さまいか、躊躇いとかそういうのがあまりないんですかね。

丸山：人に見せないスペースだったらできるけど、ここでも出せるものは全部出しちゃう。見られて恥ずかしくないものは出して。

金川：これを出そうか出さまいかみたいな葛藤とかってあんまなさそうですか。

丸山：いや、ありますよ。フリーレンの合成画像とか。

金川：ちょっと恥ずかしいとかじゃなくて、自分にとっての秘密みたいな。今まで奥に秘めていたけど、これを機に出してみようみたいなものとかってありそうですか。

丸山：あるといえばあるけど……

金川：出そうか、出さまいかみたいな葛藤をするか、丸山さんの作業みたいに出せるものをバーっと出して考えるっていう、バーっと出すのができなかったり、バーっと出す手前で何を出そう何を出そうってうろうろする人もいると思うんですよね。

丸山：本当に一人っきりの作業だったら、とにかく出して。ダメなものを弾く派じゃないので、捨てないで取っておいて数ヶ月、数年後にネタになる。

金川：それも制作っていうことがゴールというか、常にやるべきことやりたいこととしてあって、丸山さんはそうなんだってことだと思いますけど。他の人がやったのを見てみたいっていうのはありますね。

丸山：答えが出るものじゃないですよ。成果物としてというよりも。

金川：この作業自体が成果物になるとかいうことではなくて。

丸山：金川さんの場合は、これを開催された方だし、金川さんが作品として出しても納得なんですけど、これに参加された方はこれを展開してどう……？ 言ったらこれ、永遠に続く作業じゃないですか。

金川：永遠に続く作業だけどこかで終わられる。別に永遠に続けなくてもどこかで終わることはできると思うんですよね。どうですか、会場に聞いてみますか？ 川又さん何かあります？ 質問とか本当何でも良いんですけど。素朴に思ったことがもしあれば。

質問者①：金川さんは、制作活動を始めた頃からご自分のことを人にお伝えしたいっていう感情があったんでしょうか？

金川：なかったですね。そういえば最初のころは全然なかったです。全然別のことをしていました。スナップ写真で。丸山さんがまさに言っているような意味で、自分のなかにある感覚みたいなものを形にしたいというのがあって。その根っこの部分には、そういうものを良しとしている自分を外に出す、そういう意味で自分のことを知ってもらいたいみたいなニュアンスがそこにはあったかもしれないけど、今みたいな感じとは違いますね。それこそ父を撮るようになって以降の僕は、こういう自分について語るようなやり方で制作をしている中で、どんどん自分のことを出す、そのリアクションがまた返ってきて自分に反映されるってこのループ自体が制作の一環になっているようなところがあります。そういう回路ができていますので、より「今度は自分のこういう部分を出したら面白いかも」とか、相互作用を面白がっている流れが今はできているのかもしれないですね。

質問者①：やっぱり写真集とか、展覧会をする上で、どんどん変わっていくとかそういう感覚なんですか？

金川：どんどんというか、変わっていく感じはここ数年がとくに強いですね。まずは『father』を出版した 2016 年くらいはまだそんなに変化はなくて。ただそうやって本を出すと、自分の話をする機会が増える。それで文章も書くようになって、そこで自分のことをどう語るかみたいなことをいろいろやるようになった。去年、一昨年とそれぞれ 2 冊ずつ本を出したというのもあり、発表の機会が一気に増えたのもあって、こうやって自分のことを喋る機会がだいぶ増えました。自分でそういう場をどんどん作っているというのもあるんですけどね。

ただね、ちょっと違う話かもしれないんですけど、数日前に末井昭さんというある種伝説的とも呼ばれるようなおもしろい編集者の人とお話させていただきました。末井さん自身もたくさん本を書いていて、めっちゃ自分の話を本にしている人なんですね。末井さんの本を読んでいたら、同じような話をけっこういろんなところで何回もされているし、実際にあったときにもしてくれる。そうやって本当にくり返し同じ話を語るということをされている。なんかそういうふうになっていくんだなと思いました。僕も自分の同じ話をもう何回もいろんなところでしてしまうんですが、それはいかがなものなのだろうとか思ったりして。

話の流れ、水路みたいなものができてしまって、ついそっちの流れに入ってしまうみたいな。本当はもっと色んな道があって、他の話もできるはずなのに、太い道が自分の中にできて、とりあえずその道を通っちゃうみたいなのが自分の身にも起こっているかもと思う

ています。

庄子：さっき丸山さんが、自分の癖が見えているみたいなお話をされていましたが、以前参加者のトークをした時に川又さんが、自分の癖みたいなものが60歳くらいになっても変わらないんじゃないかということがわかって、それがちょっと嫌だった、でも嫌だと思わなくてもいいのかもしれないみたいな話をしていたのを思い出しました。私も日記とか書いていて思うんですけど、自分の思考パターンとか癖みたいなものってあんまり更新される気がしなくて。だから川又さんが言っていた、30年後60歳になっても同じ思考パターンじゃないかって話に、その時同意したんです。わかるなと思って。でも丸山さんがさっき言っていた、自分の癖が見えてきてそれが作品に昇華されていくみたいなお話をされていたので、癖とかを良いものとして捉えていらっしゃるのかなと思って、そういう風に思いたいなって。

丸山：それはやっぱり、僕の場合は、ものを作る上で非常に大事にしている。贋作とかを見分ける時に、モレッリ式鑑定法といって、耳の形で描き方の癖を、作家のいくつかのパターンを見分けて、偽物の耳は形が違う、じゃあこれは耳が形違うから偽物ですねっていう鑑定法があるくらいに、耳とかそういうレベルで無意識が出てその人だってわかるから、その人のキャラというか。だからすごい僕は癖を大事にしている。肯定的に。

金川：庄子さんの場合、自分の癖が嫌だになっていうのってどういう感じですか。

庄子：もうちょっと変化したり、更新されていったりする自分を見てみたい。でもその兆しがなく、つまらないなみたいな気持ちです。

丸山：癖をめちゃめちゃ大事にするとは言いつつも、やっぱりいろんな段階でいろんな風に矯正はしてきましたね。美大受験とかでデッサンをやる時とか一切癖を取ったり、今度は逆に美大受験で作ったようなデッサン力とか絵の上手さっていうのをどうしているかみたいなことをやってみたり。やっぱり結局、それでも残るものというのが大事というか。最初から開き直っちゃうとそれ以上変わらないんだけど、いろんな段階を経て矯正して、残りカスみたいなものがすごい大事。

金川：逆にその、自分が変わるとか変わらないとか、今の自分を変えたいとか、あんまりそういう問題設定がないんですか？

丸山：僕ですか？ イメチェンいっぱいしますけどね。変えたいことはありますよ。

金川：そりゃそうか。でもなんか、今のこのやりとりって、庄子さんにとって問題になっていることが、実は丸山さんにとってはそもそも問題になっていないような感じに聞こえる。

庄子：川又さんはどうですか？

川又：例えば、丸山さんが今描いている絵とかの手法だったり、その手法でできた作品を、60歳くらいに自分がなった時に、全くそれと同じ手法で続けられると思えたりするのかなという。

丸山：多分、かなり違うものを作っているはずなんですけど、やっぱり癖は変わらないと思います。例えばデイビッド・ホックニーとかの初期の作品から今の作品を見ても、やっぱり独特の形態、ホックニーの形態だっていうコアは変わってないですね。ホックニーの絵だ、この色使いはホックニーとか、そういうことわかるじゃないですか。なんかびょーんとなってキュってなってる、「あーホックニーだ」って。そういうのは昔からホックニー変わっていないというか。いろいろある人は年代単位で、10年単位で変わっているんですけど、結局コアになる、こういうものをどうしようもなく作ってしまう形みたいな色みみたいなものは変わらないですね。だから僕も基本的には。

金川：その変わらない何かがあるっていうことに対して、別に悪いと思っていないっていう？

丸山：というか、それがないと作品を作れないというか。違うもの、自分にしか作れないもの、そこを信じてあげないと何を信じたらいいかわからなくなっちゃう。

川又：全然違う作風になる、過程で起こる変化みたいなことの問題なのかなって思ったんですけど。例えば日記とかだと文章だからちょっと話が違うのかもしれないですけど、ペイン

ティングとかだったら手法とかモチーフが変わるとかの違いで変化が起きると思うんですけど、上手く言えないですけど。

丸山：文章ですか？

川又：例えば文章、日記とかで自分を語るとなった時に、語り方が変わらないんじゃないかって。僕も壁で思ったんですけど、自分に対しての距離感とか自分を見る視線みたいなものは60歳ぐらいになっても変わらないのかなと思って、その変わらなさ、自分に対しての距離感と、それを言葉にする方法だったり文章、方法論と、絵を描いたりペインティングをする時の違いなのかな。

丸山：僕、分けていないです。絵も文章も同じように扱っているのは正直ある感じ。だから例えば点の打ち方とか色々変わりましたし、これじゃ良くない、じゃあどうしようっていうので、もう整形手術しまくったりして、本当にいろいろやった。で、これからも変わると思うけど、文章の書き方も多分基本的な癖は変わらないと思う。

僕、ものを集中して書き始めるのはまだ日が浅いんですけど、でもやっぱり文体っていうのをすごく改造に改造をして、散々駄目なものいっぱい作って、それでも出てきた、どうしてもこうやっちゃうなっていうのを残している。文章の点の打ち方とか、論理展開みたいなもの。例えば説明的なものが続いて風景の描写があるとか、リズムとか、そういうものって色々絵みたいに調整可能だと僕は思っていて、それをいろいろやっていく内にちょっと違う風になって、でもやっぱり僕なんだなみたいになっていう経験はありますね。まだ偉そうなこと言える立場じゃないですけど。

質問者②：私も作品を作る者なんですけど、作品を作っていると、どうしてもステートメントだったり展覧会の案内とか終わった後に文章を書くとか、書かざるをえない場面が多々出てきます。ただ、ものすごく文章が苦手で、800字くらい書くのに2週間くらい苦しんで吐きながら書くみたいなことをしなければいけなかったんですけど、最近やっと自分なりのやり方を編み出したんです。というのが、まず書くと、タイピングすると言葉をどんどん忘れていくから、音声入力で喋る。誰かを想定してインタビューに答えるようにしゃべったものをテキスト化して、箇条書きしたものを一旦 Chat GPT に投げると文章にしてくれるから、一回一回それを訂正してくださいって直して、上手いことやってくれるのでそれを

書き、また投げてをやっと出来るようになったんですよね。ただ、そうすると文体は消えるのかなっていう懸念がすごくあるんだけど、苦しんで書かずにもういいや書かなくてってなるよりは良いやと思って、伝えることを優先してそれを選んではいいるのですが。そこに文体は残るのかな？

丸山：修正しても残っているんじゃないですか。AI に全部突っ込んで修正してもらった所でもある種の文体っていういろいろありますよね。例えば、点の打ち方、さっき言っていた論理展開、ものの説明の順序だけでも文体と言えと思うから。ある程度書いたのを AI に投げちゃって、AI が直したとしても文体は残っていると思いますね。話の展開の仕方とか。

質問者②：AI 使われないですか

丸山：使ったことがないです。

金川：自分っていうものとの距離。人によってその距離がどう違うかみたいな記述、この人は客観性があるとかそんな言葉になっちゃうかもしれないけど、自分っていうものをどう見ているかってことの現れが全然違うなって思います。

いい時間なので、一旦とりあえずここで締めましょうか。今日はみなさん長時間お付き合いいただきありがとうございました。丸山さんと川又さんもありがとうございました。